

飯塚市における石炭関連施設跡の景観の変化

2 回生 新見祐樹

1. はじめに

2019 年現在、国内の石炭需要のほとんどは輸入に頼っており（資源エネルギー庁 2019）、国内に残る坑内掘りの炭鉱は北海道の釧路コールマイン株式会社だけになっている。（JOGMEC 2018）しかし、戦前から 1960 年代までは九州や北海道を中心に多くの炭鉱が存在し、日本の成長を支えてきた。八幡製鉄所からほど近い福岡県の筑豊地域も、有数の炭鉱地域だった。（飯塚市 2016）

炭鉱跡地の活用について、川副（2017）はドイツのツォルフェラインでは炭鉱跡地を産業遺産として保存・継承するとともに、大規模な都市再開発や都市政策の中に炭鉱遺産を位置づけることも、産業遺産の保存・利活用を促進する大きな要因となっているとしている。中山（2019）は、フランスにおける炭鉱跡地の景観についてバサン・ミニエの事例から、ボタ山は自然公園と遊歩道として整備され、坑道は炭鉱での仕事を文化芸術活動として紹介する場として当時の様子が復元されているとしている。現在は全く炭坑の無くなった筑豊地域においても炭鉱跡地や残されている遺構を活用する動きがあり、その跡地利用を全体的に把握する必要がある。本研究では、現在の飯塚市における炭鉱関連施設跡を地形図で比較しながら、景観がどのように変化しているのか、またどの部分が残っているのか明らかにすることを目的とする。

2. 飯塚市と筑豊炭田の概要

飯塚市は福岡県の中央に位置し（図 1）、2015 年時点での人口は 129146 人である。国勢調査に基づく人口の推移では（図 2）、1955 年以降急激に減少し、1970 年代以降の人口は落ち着いている。

全国出炭量と筑豊出炭量の推移をみると（図 3）、全国の出炭量は第二次世界大戦前がピークであり、戦後すぐは出炭量が激減したものの、日本の経済成長に伴って、増加に転じた。筑豊地域においても 1950 年代に全国の 3 割を出炭していた。しかし、1960 年代以降出炭量は減少し、1973 年に筑豊地域最後の炭鉱である貝島大野浦炭鉱の閉山をもって 0 になった。飯塚市の人口も炭鉱の閉山とともに減少しており、閉山に伴う炭鉱労働者の減少などが原因であると考えられる。

しかし、1970 年代以降は人口の変動は少なくなっている。これは、旧産炭地域における地域振興策によって工業団地の造成や大学などの誘致が行われたことで、人口の流出が抑えられたと考えられる。この時、炭鉱跡地は地域に残された、貴重なまとまった土地であることから、その場所を中心に再開発が行われた。

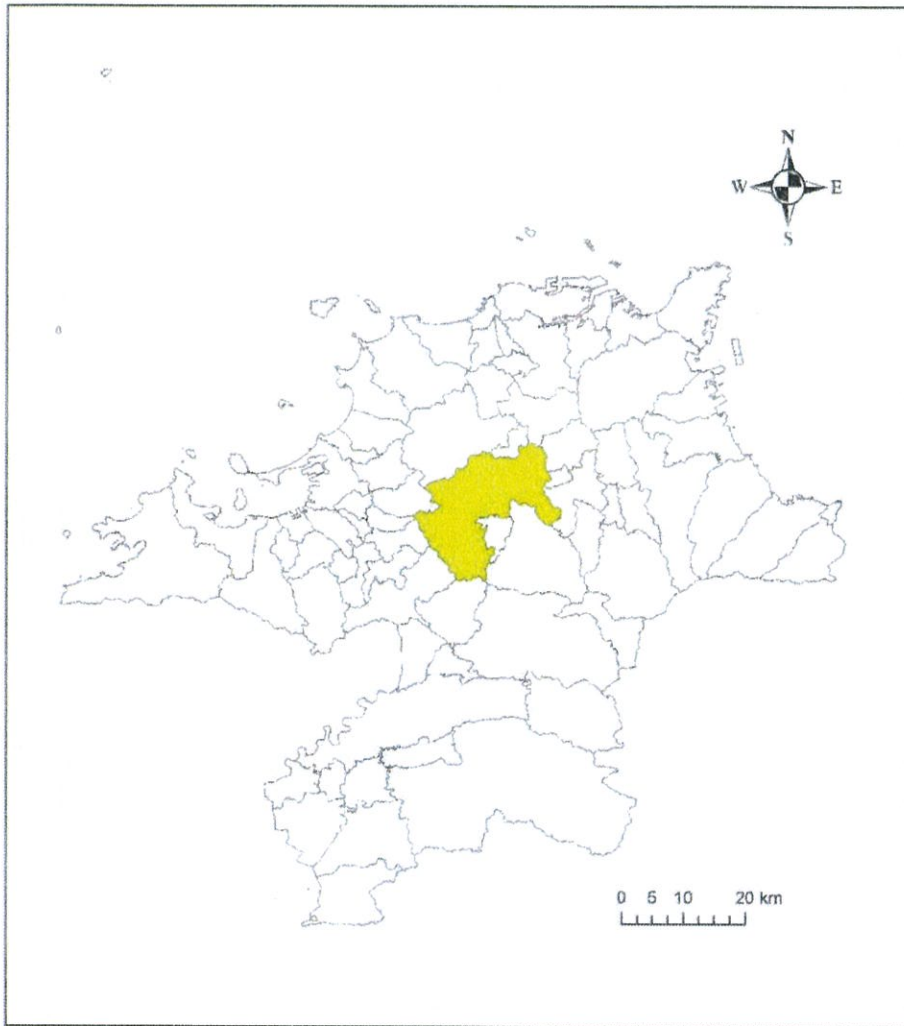


図1 飯塚市の位置

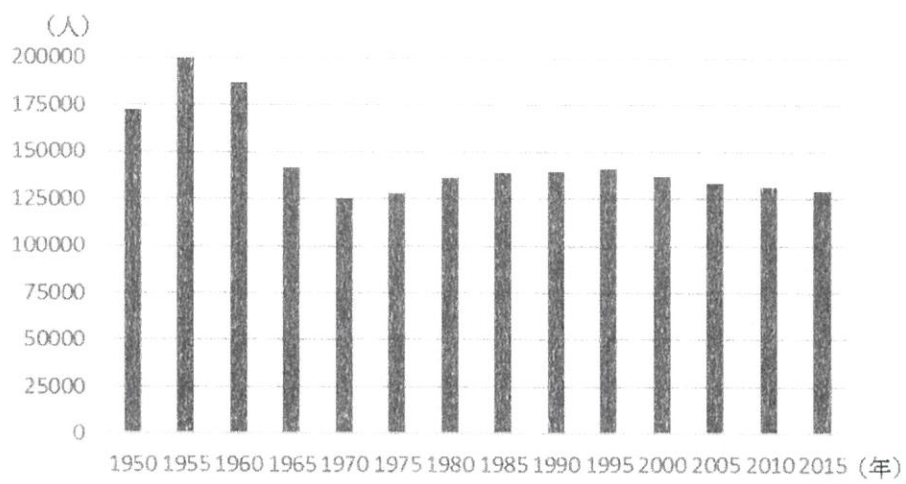


図2 現在の飯塚市域の人口推移

資料：国勢調査各年版

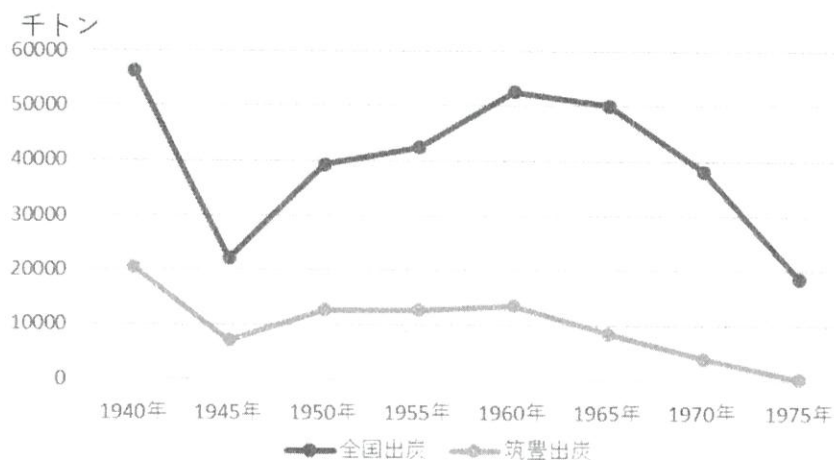


図3 全国出炭量と筑豊出炭量の推移

資料：長弘（2012）より作成

表1 1960年以降に閉山した筑豊の主な炭鉱

年	閉山した炭鉱
1960年	明治豊国、日炭山田
1961年	三菱飯塚、住友忠隈
1962年	古河大峰、三菱方城、三菱上山田
1963年	三菱新入、三井山野、麻生赤坂、麻生網分、日鉄二瀬
1964年	三井田川、大正中鶴
1965年	明治赤池、麻生山内、麻生上三緒
1968年	貝島大辻
1969年	古河目尾、麻生吉隈、明治平山
1970年	古河下山田、三菱鯉田
1971年	日鉄嘉穂、日炭高松
1973年	貝島大之浦

資料：長弘（2012）より作成

注：傍線は現飯塚市にあった炭鉱を示す

3. 炭鉱跡地の景観の変化

1947年、1969年、1996年発行の地形図比較して、炭鉱とその跡地がどのように変化しているか調べた。

1947年（図4）では、筑豊地域において規模の大きかった忠隈炭鉱や飯塚炭礦をはじめとして、いくつかの炭鉱があることが分かる。その周辺には炭鉱労働者の住む炭住が並んでおり、掘られた石炭を輸送するための鉄道も多数引かれていることが読み取れる。このことから、飯塚市が石炭産業で栄えていたことがうかがえる。

1969年（図5）では、忠隈炭鉱や飯塚炭礦はすでに閉山しており、その後の工業団地への利用のために整地されている場所もあるが、鯉田炭鉱のように残っている炭坑もある。

る。日鉄二瀬坑や中央坑、製鉄所潤野坑のあった市街地の西側は跡地の整地が行われ、幸袋線が廃止された場所は築堤が残るだけになっている。麻生山内炭坑跡地にはすでに近畿大学工学部が設置されており、跡地利用が進められていた。

1996年（図6）では、整地が行われた場所では工業団地の整備がされた。庄内工業団地は、産炭地域振興事業団によって周辺のボタ山とともに造成されている（庄内町教育委員会1998）。また、九州工業大学や近大九州短大が設置されている。石炭輸送に利用された鉄道路線は筑豊本線と後藤寺線以外の国鉄線と専用鉄道はすべて廃止され、跡地は道路へ転用されている。採炭が行われているため山の形が乱れている。

採炭の際に付随して発生する廃石をボタというが、筑豊地域では農地や人家が散在しており、捨て場の制約があったため、山のように積み上げられたものがボタ山と呼ばれる。筑豊炭田の終焉時期には、大小合わせて500のボタ山があったと言われるが、（神津2006）現在飯塚市内に残るのは日本一と言われた（穂波町教育委員会1998）忠隈のボタ山だけであり、地形図では6つの山頂を持つ円錐形の山が読み取れる。

忠隈地区に注目してみると、1947年には忠隈炭砒・飯塚炭礦と記載されている場所の周りに、炭住と思われる建物が数多く並んでおり、この忠隈地区だけでも多くの人口を抱えていたことをうかがい知ることができる。このころにはボタ山が形成されているかは読み取ることができないが、地形が窪んでいることから、地形が変化するほど産炭が行われていたことが推測できる。（図7）

1969年の段階では、ボタ山の南側が平地になっている。忠隈炭砒と飯塚炭礦は、筑豊地域の中でも比較的早い1961年に閉山しており、この場所では1967年から飯塚工業団地の造成が行われている。また、縮尺が異なるため単純な比較はできないが、ボタ山の北側の建物の密集具合が、弱くなっているように感じる。炭鉱労働者たちが減少したことによる変化であると捉えることができるのではないかと。（図8）

1996年には、飯塚工業団地にいくつか工場がみられ、造成が進んだことが分かる。ボタ山は、北側の3つは変化が見られないが、南側の3つは崩されている。また、飯塚炭礦から掘り出された石炭を運んでいた、上山田線が廃止になっており、線路跡は道路に転用されている（図9）。

表2 地形図から読み取れる変化（地形図から判別）

期間	飯塚市	忠隈地区
1947～1969年	近畿大学工学部設置 幸袋線廃止 日鉄二瀬坑・中央坑、 製鉄所潤野坑跡地整地	忠隈炭砒、飯塚炭礦閉山 飯塚炭砒跡地整地
1969～1996年	鯉田炭礦閉山 鯉田坑送炭線廃止 漆生線・上山田線廃止 鉄道跡地の道路転用 九州工業大学設置 庄内・後辛田・ 潤野工業団地整備	近大九州短大設置 ボタ山の一部分が崩される

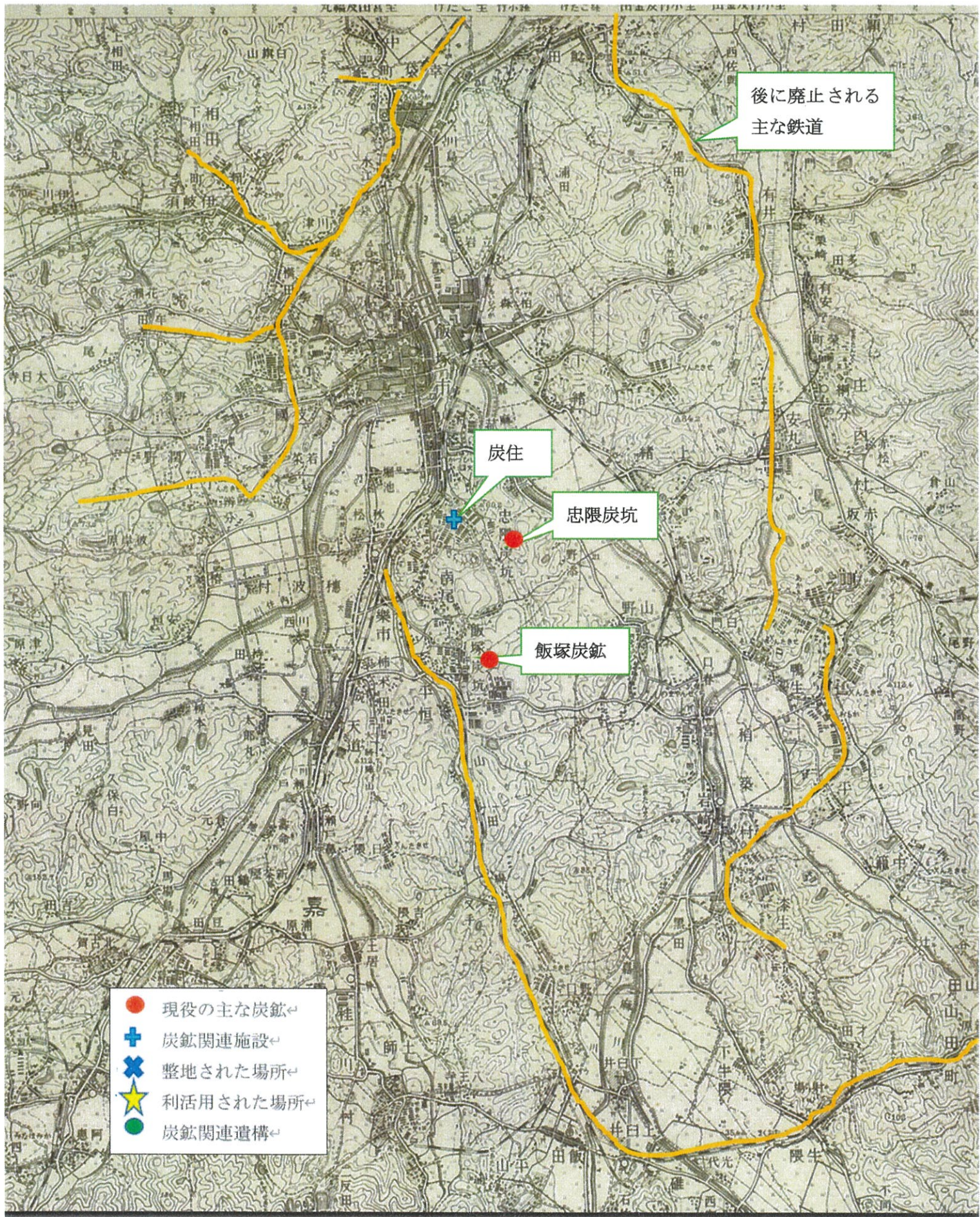


図4 1947年にみられる炭鉱と関連施設
資料) 1947年発行の50000分の1地形図

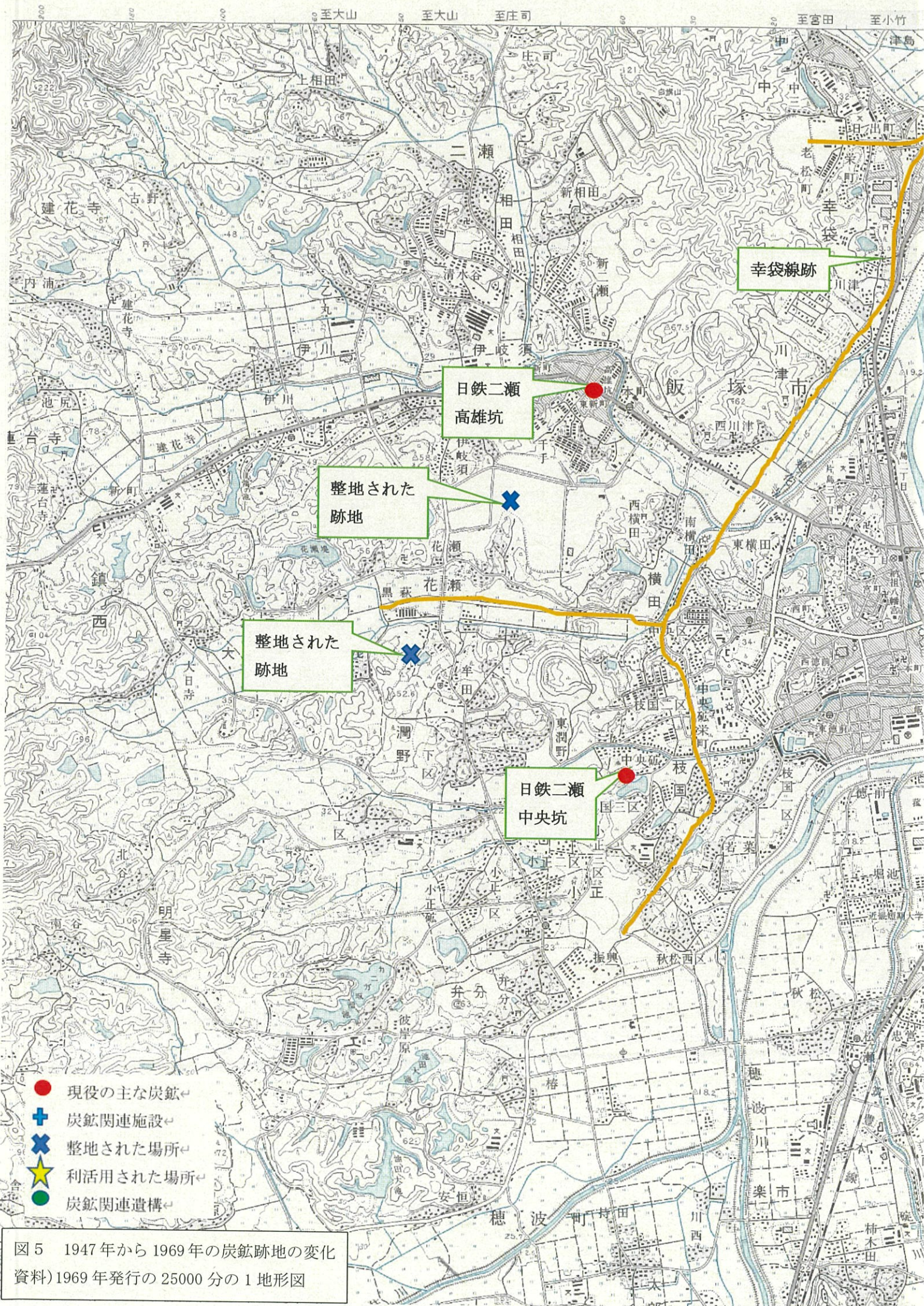
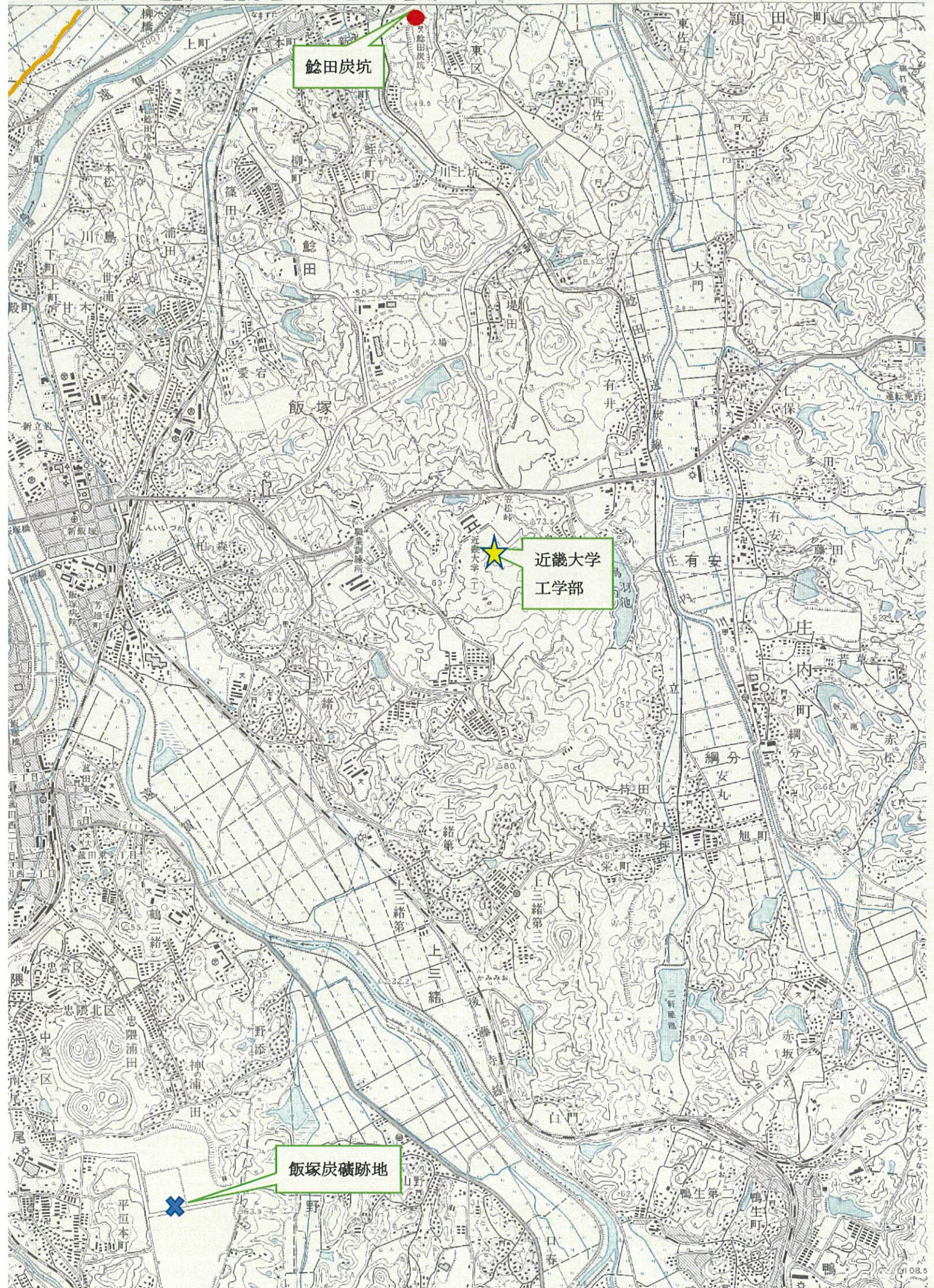


図5 1947年から1969年の炭鉱跡地の変化
 資料)1969年発行の25000分の1地形図

銚田炭坑

近畿大学
工学部

飯塚炭坑跡地



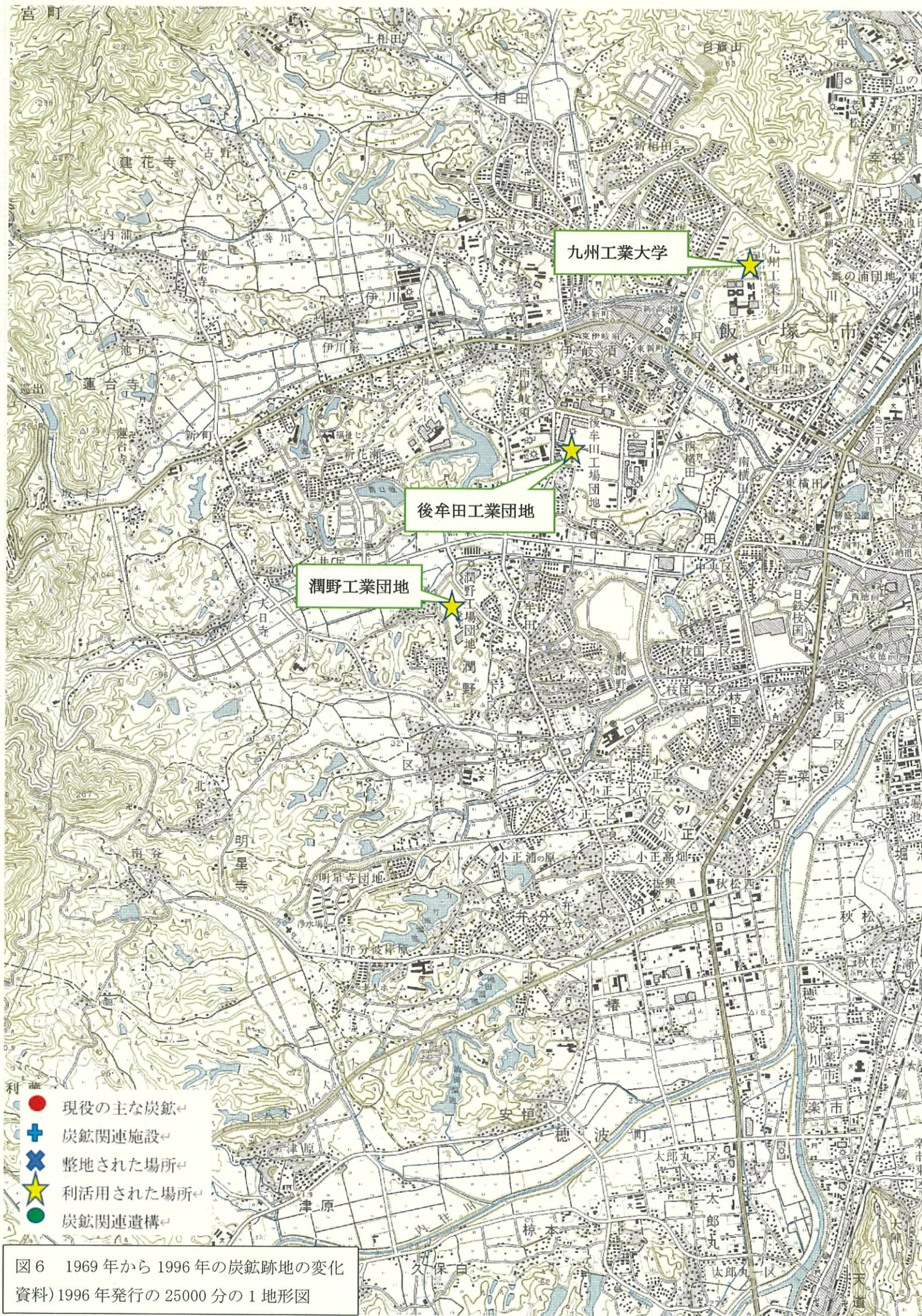
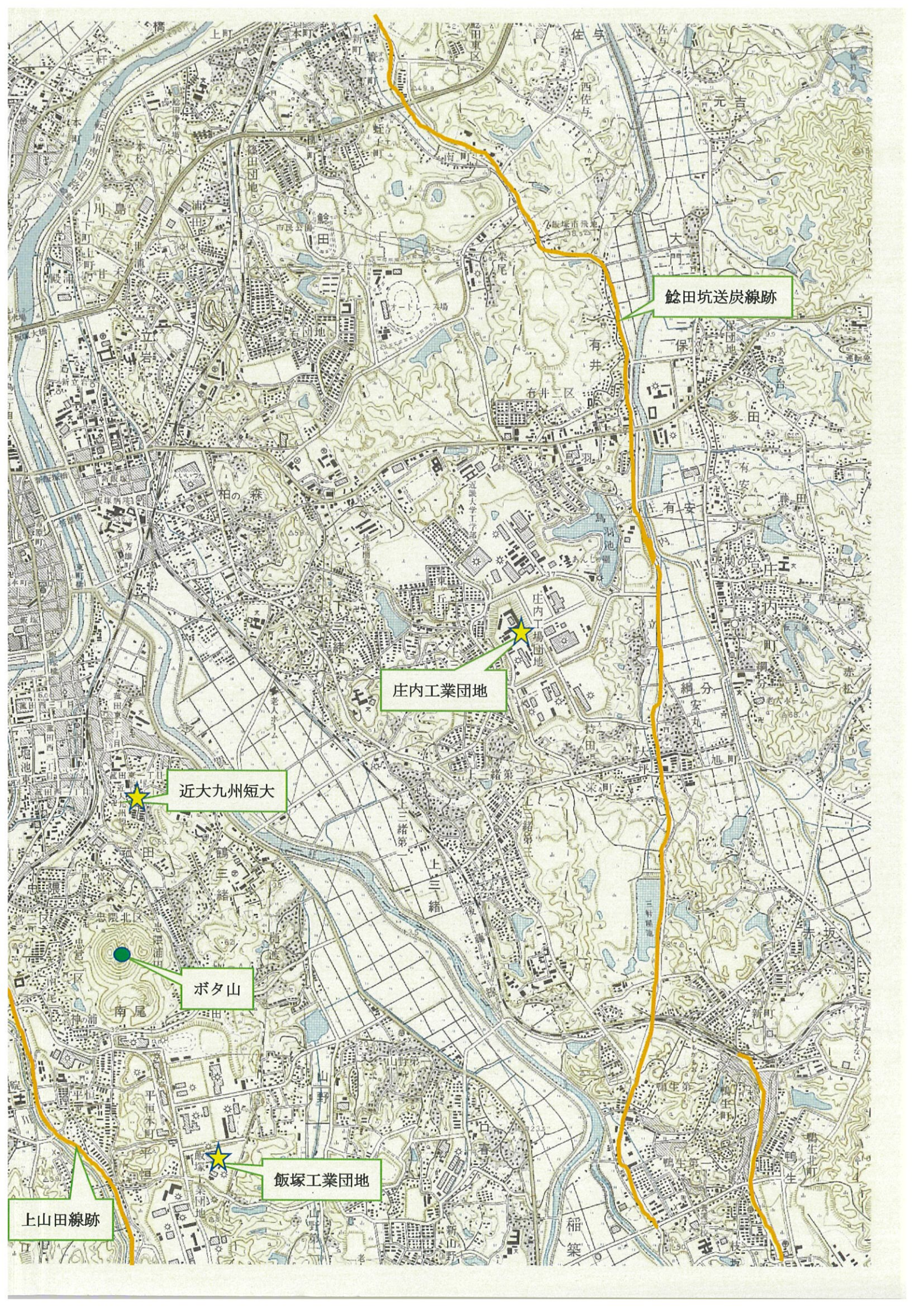


図6 1969年から1996年の炭鉱跡地の変化
資料) 1996年発行の25000分の1地形図



銚田坑送炭線跡

庄内工業団地

近大九州短大

ボタ山

飯塚工業団地

上山田線跡



図7 1947年発行の50000分の1地形図

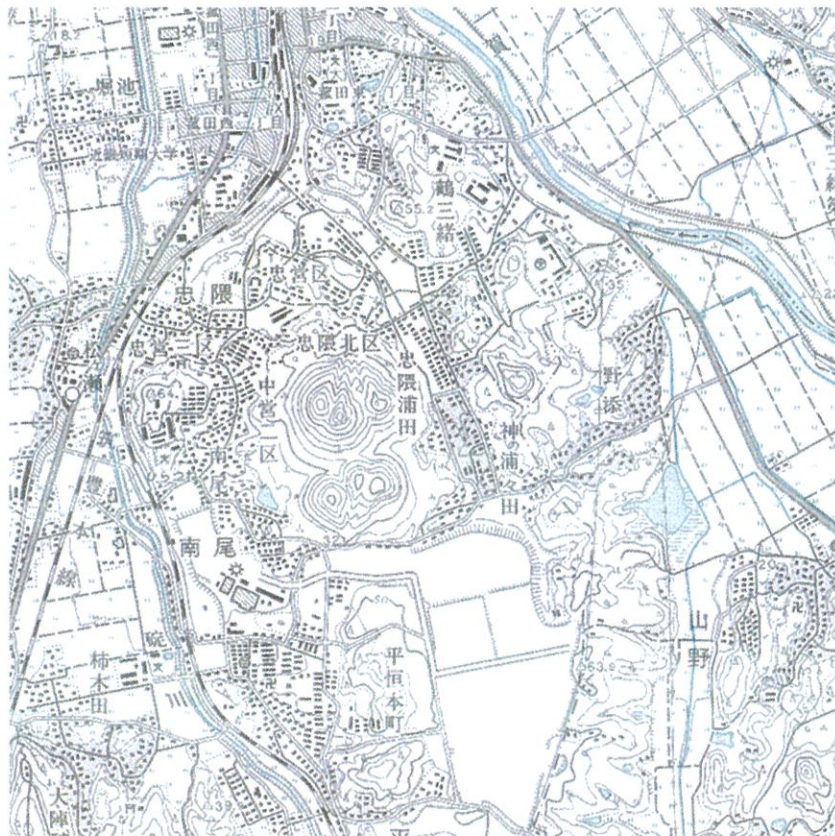


図8 1969年の25000分の1地形図



図9 1996年の25000分の1地形図

1950年代の最盛期には飯塚市内の至る所にあった炭鉱だが、現在その痕跡が残る場所は少ない。坑道本体は入り口がふさがれており、地下のどの部分で採炭が行われたかは、そこを掘っていた業者しか把握していない。炭礦は市内各地にあったが、遺跡があるのはごく一部である。多く残されているのは、坑道の入り口に設置されていた巻き上げ機の台座（写真2、3）である。煉瓦でしっかりとつくられており、炭坑の規模の大きさを想像することができる。

図10は飯塚市にあった主な炭鉱と、現在も残っている遺跡の分布を示したものである。主な炭鉱は飯塚市各地に存在していたが、遺跡は現在唯一ボタ山が残る忠限地域に集中していることが読み取れる。ボタ山自体はこの地で採炭していた住友鉱山が所有しているが、周辺は住宅地になっている。多くの住宅は再開発によって建てられた戸建てだったが、一部には炭住が残っている（写真4）。地割も車が1台やと通れる幅の道路が残っており、当時から変化していないと思われる。住民の中には、1960年代からずっと炭住に住み続けている人もいる。

このように忠限地区に炭坑の名残が比較的多く残る理由として、ボタ山が残っていることが考えられる。炭鉱があった証として筑豊の各地に散在していたボタ山だが、飯塚市を含む旧産炭地域の振興策がとられる中で、道路や陥没地などの盛土・埋土として利

用されるに伴って崩された。特に、焼ボタ山と呼ばれるものはシャモットとして道路の路盤材量のほか新幹線や九州自動車道の工事に利用されたり、炭分が多く含まれるものはセメント材料として使われてきた（飯塚市 2016）。しかし、忠隈のボタ山は日本一と呼ばれ、標高 141m と規模が大きかったため（中山 2019）簡単に崩すことができず、現在まで残ったために周辺の再開発が大規模に行われず、したがって周辺に少しずつ炭鉱であった痕跡が残っていると考えられる。

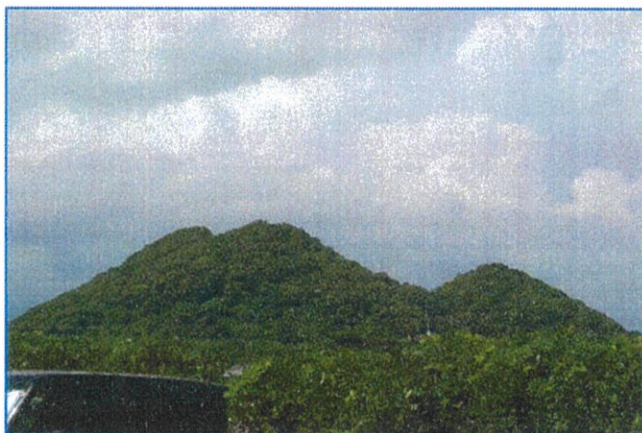


写真 1 忠隈に残るボタ山



写真 2 飯塚炭鉱の巻き上げ機台座



写真 3 忠隈炭鉱の巻き上げ機台座



写真 4 忠隈地区に残る炭住

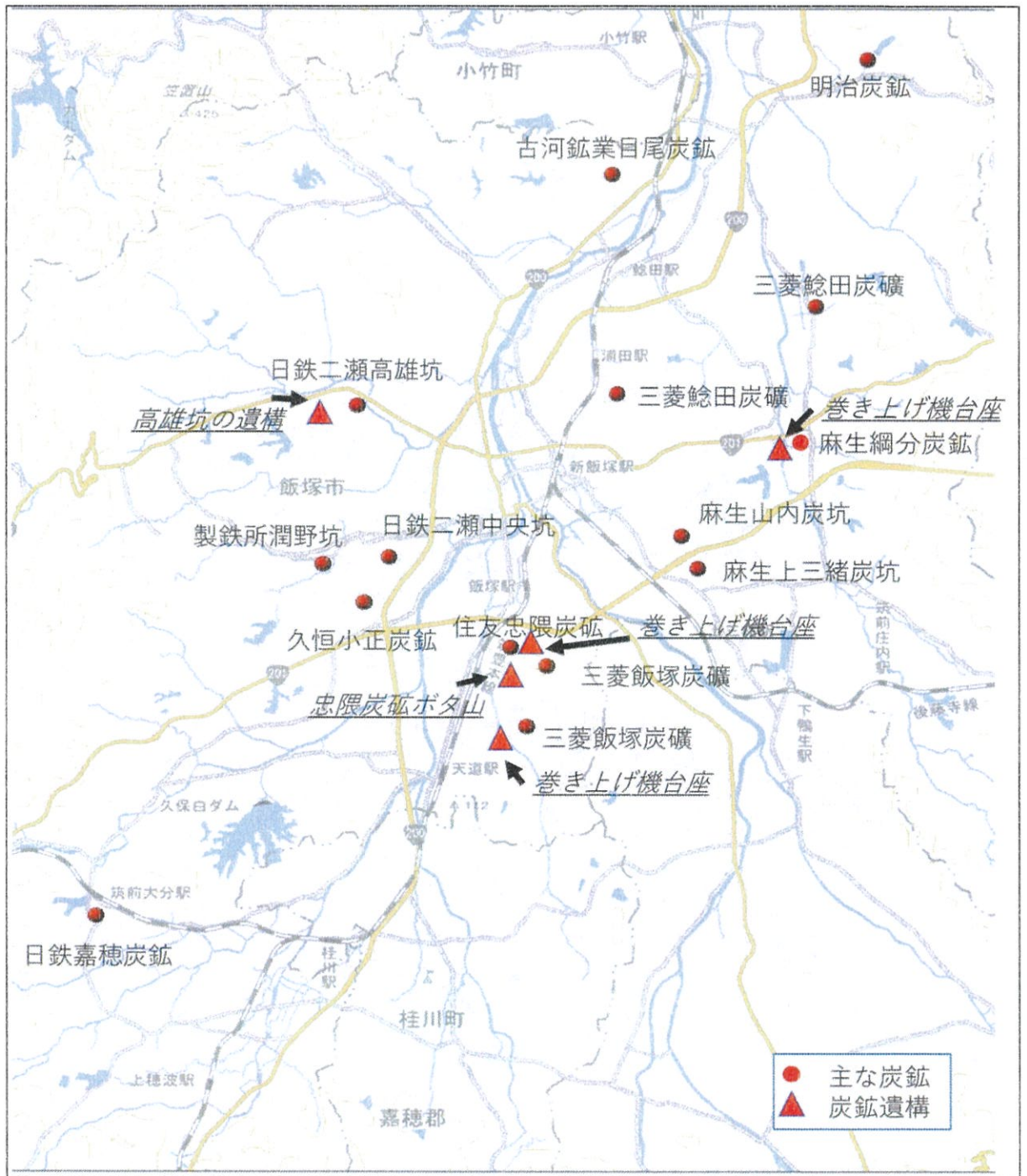


図10 飯塚市の主な炭鉱と炭鉱遺構の分布

資料：飯塚観光協会（2019）より作成

5. おわりに

本稿では、飯塚市における石炭関連施設跡の景観の変化について分析した。国内有数の産炭量を誇った筑豊地域・飯塚市において、現在はその痕跡が少なく、跡地が工業団

地や教育施設として整備されていた。これは、関連施設がそのまま残され、文化的資源として観光などに活用されているドイツやフランスとの相違点である。筑豊炭田の衰退によって急激に減少した人口は、炭坑跡地の再開発によってつくられたこれらの工業団地や大学の整備によって、食い止められたと思われる。半面、忠隈ではボタ山を中心に遺跡がいくつか見られた。特に忠隈に唯一残るボタ山は、筑豊炭田の風景を象徴するもので、ドイツやフランスで炭鉱のシンボルとして残されていることと共通している。今後は、筑豊地域が産炭で栄えたことを伝える貴重な存在として、利用することが考えられるのではないだろうか。

付記

本稿を作成するにあたり、飯塚市教育委員会の八木健一郎様、飯塚市役所経済部の榎井靖博様、田松賢士様、飯塚観光協会の稗田涼子様には、お忙しい中大変お世話になりました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

参考

- 資源エネルギー庁『平成30年度エネルギーに関する年次報告』（エネルギー白書2019）
- JOGMEC(2018)『JOGMEC NEWS 55』
- 川副早央里(2017)『ドイツにおける炭鉱跡地の活用と地域存続の戦略 世界遺産ツォルフェライン炭鉱の事例から』ソシオロジカル・ペーパーズ(26), 31-42
- 中山英光(2019)『フランスにおける炭鉱跡地の景観—世界遺産バサン・ミニエの事例から』地理 771号 68-76
- 飯塚市(2016)『飯塚市史 中巻』
- 穂波町教育委員会(1998)『穂波町ものがたり《炭鉱編》』
- 神津良子(2006)『図解 嘉穂・鞍手・遠賀の歴史』郷土出版社
- 長弘雄次(2012)『筑豊の石炭に生きた日々の記憶～筑豊炭田開発技術論文選集～』文字の花書房
- 庄内町教育委員会(1998)『庄内町史』